

## 別紙 4

|      |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

## 主 論 文 の 要 旨

|      |                             |
|------|-----------------------------|
| 論文題目 | 青年期における時間的展望と<br>アイデンティティ形成 |
| 氏 名  | 石井 僚                        |

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、青年期の時間的展望とアイデンティティ形成について検討することであった。特に、時間的展望に関しては、過去、現在、未来という全ての時間、そして人生の終点である死までの展望を持つことについて焦点を当て、アイデンティティ形成に関しては、そのプロセスとプロダクトの両方に焦点を当てて検討を行った。本論文を通して、時間的展望の拡張とアイデンティティ形成の観点から、青年期発達の様相を明らかにした。

第1章では、これまでの時間的展望およびアイデンティティ形成に関する先行研究をレビューし、その問題点について論じた。先行研究の問題点として、時間的展望について検討する際、その検討対象が未来という時間に偏重しており、現在や過去という時間についても検討する必要があることを指摘した。また、同じく時間的展望について、死という人生の終点を踏まえた時間的展望を持つことが青年期発達に関わることを指摘されている一方、その実証研究がなされてきていないことを指摘した。アイデンティティ形成については、特に時間的展望との関連においては、形成がなされたプロダクトにばかり焦点が当てられており、プロセスとプロダクトの両方に着目して検討を行う必要があることを指摘した。最後に、これらの問題点を乗り越えるための本論文における方法論について論じた。

第2章では、時間的展望の認知的側面である時間的指向性について、未来のみでなく現在や過去という時間についても検討を行うための方法論の検討を行った。研究者によって扱い方が異なるなど概念的に未整理な状態であった時間的指向性を、時間的連続性および時間意識の2下位概念に分け、研究1では時間的連続性を測定するための方法の作成およびその信頼性と妥当性の検証を、研究2では時間意識を測定するための方法の作成およびその信頼性と妥当性の検証を行った。これらを通して時間的指向性に関する

概念整理が行われたことで、矛盾の見られた先行知見が統合され、今後の検討を系統立てて行うことが可能となった。

第3章では、過去、現在、未来をすべて含む時間的展望と、アイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトとの関連について検討を行った。研究3においては、Luyckx, Goossens, Soenens et al. (2006) のアイデンティティの二重サイクルモデルに基づき、各形成プロセスと各時間的態度および時間的展望プロフィールとの関連について検討した。その結果、過去に対する否定的な態度が探求のプロセスと関連していること、未来に対する肯定的および否定的な態度が、アイデンティティ形成を進める全てのプロセスと関連すること、そしてそうした未来や過去に支えられる現在に対する態度が、アイデンティティ形成の各次元と関わっており、特に否定的な現在への態度とコミットメント形成のできなさが関連することが示された。また、時間的展望プロフィールに関しては、肯定型および過去否定型の青年が、各アイデンティティ形成プロセスに傾倒していることが示された。研究4においては、Crocetti et al. (2008) のアイデンティティ形成の3次元モデルに基づき、各形成プロセスと時間的態度および時間意識との関連について、アイデンティティ形成のプロダクトの様相に分けて検討した。その結果、アイデンティティ形成の初期においては、過去への意識の高さが、中期以降では現在と未来への意識の高さが、アイデンティティ形成の各プロセスと関連することが示唆された。また、アイデンティティ形成の初期においては過去の受容のできなさがコミットメント対象の探索に、中期においては肯定的な現在と未来が各形成プロセスに、後期においては肯定的な未来と現在がコミットメントとその維持につながることを示唆された。これらの研究を通して、アイデンティティの形成に、時間的展望は未来のみでなく、過去や現在も関連していること、そしてそうした関連は、アイデンティティの形成がどの程度進んでいるかに応じて異なることが明らかになった。

第4章では、終点を踏まえた人生全体の時間という視点が検討されてきていないという問題点を解決するため、死について考える課題に取り組ませることで、終点を踏まえた人生全体の時間について検討した。研究5では、研究参加者を死について考える課題を行う群、生きがいについて考える課題を行う群、死や生きがいは無関係なものについて考える課題を行う統制群の3群に分けて実験を行った。その結果、死という終点を踏まえた人生全体の時間という視点を持つことは、人生の有限性を再認識することであり、その結果として、目標への指向性や現在の充実感を高めるなど、時間的態度が肯定的になることが明らかとなった。研究6では、研究5の結果を受けて、死について考えることの時間的態度への効果の個人差について、時間意識、死の捉え方の観点から検討を行った。その結果、現在への意識を高く持つ場合に、死について考えることが目標指向性や現在の充実感を高めることが明らかとなり、アイデンティティの確立という青年期の発達課題との関連が窺われた。

研究6の結果を受けて、研究7では、終点を踏まえた人生全体の時間という視点が、アイデンティティ形成にどのような影響を与えるのかについて検討を行った。その結果、死について考えることは、コミットメントを持っていない青年に対して、その形成を促すような効果を持つこと、そしてその効果は、死という終点を現在から近いものとして考えさせるか、遠いものとして考えさせるかによって異なることが明らかとなった。コミットメントは持ってないが探求はしている青年の場合には、不安もありながら死への関心も強いため、青年の持つ短い未来展望の中で訪れる近い死について考えることが効果を持っていた。一方で、コミットメントも探求も持ってない青年の場合には、潜在的な死との連合も強いため、これからも続く人生の後、遠い未来に起こる死について考えることが効果を持つことが明らかとなった。

第5章では、本論文の総括的討論として、本論文の意義、本論文の限界と今後の展望について議論を行った。本論文は、青年期の時間的展望とアイデンティティ形成に関する研究に対する意義と、青年期の支援に対する意義を持つと考えられる。研究1および研究2において、時間的展望の認知的側面である時間的指向性の概念整理および新たな測定方法が提案されたことは、これまでの時間的展望研究が見出してきた知見の矛盾点を統合できること、そしてこの後の時間的展望研究を系統立てて行うことが可能となった点において意義があると思われる。方法論上の発展に加え、本研究で得られた各時間についての時間的展望とアイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトとの関連に関する知見は、青年がこの時期の発達課題をどのように乗り越えていくのかについてより詳細に明らかにできた点で意義がある。さらに本研究は、これまでその関連や効果が主張されるばかりで実証されてこなかった、死という人生の終点までの展望を持つことについて、アイデンティティ形成の観点から青年期発達とどう関わるのかについて、その具体像を明らかにした点で意義があると考えられる。

青年期の時間的展望とアイデンティティ形成についての研究に対する意義に引き続き、青年期の支援に対する意義について議論した。青年のアイデンティティ形成の度合いに応じて、どの形成プロセスに傾倒することが必要なのか、そのプロセスと関連する時間的展望の様相から見極めたり、時間的展望に働きかけたりすることで、そうした青年のアイデンティティ形成を支援することが可能と思われる。死に関する問題についても、コミットメントや探索の状態によって、どのような顕在的、潜在的な死に対する態度を持っているのかについて本研究では示唆されており、自殺といった死に関わる問題に配慮する際の視点を提供できた点も意義がある。また、本論文で得られた知見は、デス・エデュケーションとしての発展の可能性も包含しており、よりよく青年期発達を促していく際の支援につなげていくことができると思われる。

最後に、本論文の限界と今後の展望について議論を行った。具体的には、縦断調

査を行っていく必要性，また，本研究が対象とした青年期後期のみでなく，青年期前期や中期に対象を拡大していく必要性などが議論された。研究手法，研究対象を広げ，より実証的な知見を積み重ねていくこと，そして本論文で得られた知見をもとにして実践的研究を行っていくことが今後の展望とされた。